

日本語韻律への注意には何が影響するか

—イタリア・ロシア・中国・ベトナムの日本語学習者の「音楽経験」を
比較した予備的研究—

阿部 新（東京外国語大学）

磯村 一弘（国際交流基金）

林 良子（神戸大学）

要旨

日本語韻律習得における個人差要因の影響を検討することを目的として、第二言語音声の習得を強化する「音楽経験」が、言語学習を促すインパクトの役割を持つ「日本語韻律への注意」にどう影響するか考察した。データは、WEB 形式の質問紙によって、2017 年から 2019 年にかけて、イタリア、ロシア、中国、ベトナムの日本語学習者計 102 名から収集した。データ分析の結果、音楽経験がない人は音楽経験者に比べて「自分の音声産出への注意」が多い一方、そもそも注意しないという人も多いことがわかった。一方、音楽経験者は音韻知識にも意識を向けつつ他者からの言語（音声）情報の処理も行おうとしていることがわかった。音楽経験が、多彩な情報に注意を向けて言語学習がより促されるような注意を行うことに繋がる可能性が示された。

【キーワード】個人差、第二言語習得、気づき、アクセント、イントネーション

Keywords: individual differences, second language acquisition, awareness, accent, intonation

1 研究の背景と目的

筆者らはこれまで、「外国語発音習得研究会」を組織して日本語の韻律習得についての研究を進めてきた。そこでは、海外での日本語韻律教育の現状調査（阿部他 2020）、母語別のアクセントの知覚や産出の傾向の分析（王他 2017 など）、韻律トレーニング方法の開発やその効果の検証（金村・松田 2020、王他 2021 など）を、学習者の母語別や教育が実施される地域別の観点で行ってきた。しかし、第二言語習得には学習者の個人差も大きく関与する（福田他 2022 など）。様々な個人差要因のうち、本研究では「音楽経験 (musical experience)」を取り上げる。

まず、音楽と第二言語習得の関係を検討した先行研究では、音楽能力 (musical

ability), 音楽の訓練 (music training), 音楽の知識・スキル (musical expertise) などが取り上げられてきた。音楽能力 (サンプルとターゲットとなるメロディー, リズムなどが, 部分的に異なっているにもかかわらず同一であると判断する能力) と第二言語の発音や知覚との関係は不明な部分が多く, さらなる研究が必要だとされている (Trofimovich, Kennedy & Foote 2015, Derwing 2018)。一方, 音楽の訓練や音楽の知識・スキルと第二言語学習との関係については, 音楽の訓練経験が声調の聞き分け等の処理, 音の長さの処理, 音声産出, 文章の知覚 (理解) を強化するという結果が得られている (Zeromskaite 2014)。本研究では, 「何らかの音楽的活動 (楽器の演奏等) の指導の受講経験」を「音楽経験」とし, 音楽の訓練や音楽の知識・スキルと同様に, 第二言語音声の習得を強化するかどうかについて検討する。

先行研究においては, 言語適性や言語処理能力, 言語の知覚や産出の能力と音楽との関係が検討されているが, 本研究では, 「日本語韻律への注意 (attention)」を第二言語学習における「気づき」と見なして取り上げる。赤木 (2021) によれば, 「気づき」には, 第二言語習得論における「気づき (noticing, focal awareness)」と言語意識における「気づき (awareness, conscious awareness)」があり, 前者は「第二言語習得過程に必要且つ重要な認知活動」, 後者は「言語学習を促すためのインパクトの役割を持つ認知活動」と捉えられている (赤木 2021)。前者は「気づきの対象を目標言語そのものとしている」のに対し, 後者は「言語形式, 言語学習 (学習動機や学習法など) …【中略】…など, 広範な領域を含めている」としている (赤木 2022:3)。本研究の「日本語韻律への注意 (attention)」は, 目標言語そのものに限らず, 広範な気づきを対象とすると判断して, 言語意識における「気づき」に含まれるものとして捉えることとする。

以上から, 本研究では日本語韻律習得における個人差要因の影響を検討することを目的として, 第二言語音声の習得を強化する「音楽経験」が, 言語学習を促すインパクトの役割を持つ「日本語韻律への注意」にどう影響するか考察する。

2 調査およびデータの概要

本研究の分析データは, 日本語アクセントの発音データ収集と同時に実施した WEB 形式の質問紙を用いて集められた。調査地, 調査時期, データ件数は, イタリア (以下, 「伊」) で 2018 年 3 月～7 月に 16 件, ロシア (以下, 「露」) で 2018 年

4月～5月に12件，中国（以下，「中」）で2017年10月と2019年6月に61件，ベトナム（以下，「越」）で2019年9月に13件で，合計102件である。

調査内容は呉他（2016），齋藤（1996）を参考にした。発音学習ストラテジーの実施状況，言語学習についてのビリーフ，教師による発音指導の内容，使用教科書についてである。さらに，フェイスシートにおいて国籍，母語，日本語学習年数，日本滞在歴，日本語韻律への注意，日本のポップカルチャー（アニメ，ドラマ，映画，ゲーム）への接触経験・頻度，音楽経験（楽器や歌唱の指導受講）の有無・年数，自主的音楽活動経験（バンド，アカペラ，カラオケ）の有無・年数を尋ねた。

3 結果

3.1 日本語韻律への注意

まず，日本語韻律への注意について国別の傾向を見てみよう。「日本語を話すとき，あなたがアクセントやイントネーションについて注意していることはありますか？」と尋ねた。選択肢は以下の図1の通りで，複数回答可である。

A「できるだけ自然なアクセントになるように気をつけている」，B「単語を覚えるとき，アクセントもできるだけ覚えるようにしている」，C「アクセントがわからないことがあったら，辞書などで調べるようにしている」，D「日本人の発音を聞くととき，単語のアクセントに注意して聞いている」，E「文全体のイントネーションができるだけ平らになるように話している」，F「その他」，G「特に何もしていない」

図1：アンケートの選択肢一覧

表1：国別の注意の平均個数と各注意の回答者の割合

	伊	露	中	越
注意の平均個数	2.9 個	2.3 個	3.2 個	2.6 個
A 気をつけて話す	75.0%	8.3%	73.8%	61.5%
B アク覚える	87.5%	33.3%	85.2%	38.5%
C 辞書調べる	37.5%	25.0%	63.9%	23.1%
D 注意して聞く	93.8%	75.0%	57.4%	53.8%
E 平らに話す	0.0%	33.3%	31.1%	46.2%
G 何もしない	0.0%	25.0%	1.6%	15.4%

（F「その他」はどの国も選択者がいなかった。）

表1に国別の注意の平均個数（個）と国別の各注意の回答者の割合（％）を示

す。注意の個数は各国とも3個前後と大きな違いがないが、各注意の回答者割合は大きく異なった。中は、イントネーションに関するEがやや少ないが、A～Dのアクセントに関する注意はどれも割合が高い。伊はA, B, Dが多く、アクセントに注意する割合が高いが辞書を調べる割合は低い。越はイントネーションに関するEの選択割合が高めである。アクセントについてはA, Dのような、話す・聞くという注意は行うが、B, Cのような、覚えたり調べたりという活動はあまり行わない。また、何もしないという者も一定数いる。露はDは多いが、他はそれほど多くない。また、何もしない者（G）も25%おり、他国との違いが目立つ。

3.2 音楽経験

次に「今までに、個人や学校での音楽の指導を受けた経験がありますか。」と尋ね、鍵盤楽器、弦楽器、管楽器、打楽器、歌唱について、指導形態（個人指導、団体での指導、学校の授業で）と何歳から何歳まで指導を受けたか回答してもらった結果を、指導内容や指導形態で分けずに「音楽経験」としてまとめて集計した。国別の音楽経験者の割合は、伊93.8%、露75.0%、中36.1%、越0.0%となり、国別の音楽経験者の平均経験年数は、伊4.9年、露5.6年、中1.4年、越0.0年となった。伊や露といった欧州では経験者の割合が高く、経験年数もある程度あるが、中や越といったアジアでは経験者も少なく、年数も短かった。特に越では経験者がいなかった。

3.3 日本語韻律への注意と音楽経験

「日本語韻律への注意」と「音楽経験」について、音楽経験の有無別の各注意の回答者割合を表2に示す。音楽経験がある人はない人よりB, C, Dの回答が多く、音楽経験がない人はある人よりA, Eの回答が多く、注意しない人も多いという結果となった。

表2：音楽経験の有無と各注意の回答者割合（%）

	経験あり 56名	経験なし 46名
A 気をつけて話す	60.9	67.9
B アク覚える	76.1	71.4
C 辞書調べる	52.2	48.2
D 注意して聞く	67.4	62.5

E 平らかに話す	21.7	35.7
G 何もしない	4.3	7.1

4 考察

上記表 2 の結果から、第二言語音声の習得を強化する「音楽経験」が、言語学習を促すインパクトの役割を持つ「日本語韻律への注意」にどう影響するか考察する。音楽経験がない人は経験者に比べて A や E のような「自分の音声産出への注意」が多く、そもそも注意しないという人も多い。それに対し、音楽経験者はない人に比べて D のような「相手の産出音声への注意」や、B や C のような「音韻知識と積極的に結びつける行動」も多い。つまり、音楽経験者の方が、音韻知識にも意識を向けつつ他者からの言語（音声）情報の処理も行おうとしており、多彩な情報に注意を向けることで言語学習がより促される可能性があると言えるだろう。

5 おわりに

以上、日本語韻律習得における個人差要因の影響を検討することを目的として、第二言語音声の習得を強化する「音楽経験」が、言語学習を促すインパクトの役割を持つ「日本語韻律への注意」にどう影響するか考察した。その結果、音楽経験者のほうが、言語学習がより促される可能性のある「気づき」をより多く行っていると推測された。音楽経験と言語への注意の関係について興味深い結果となったが、この考察はまだ推測の域を出ておらず、今後、より詳細な考察が必要である。

<謝辞>

調査に協力してくださった各国の大学の先生方と学習者の皆様に深く感謝申し上げます。本研究は JSPS 科研費 21H04348, 18K00682, 17H02352 の助成を受けた。

<引用文献>

- 赤木浩文（2021）「第二言語学習における「気づき」について」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』21, pp.261-272.
- 赤木浩文（2022）「ビジターセッションを取り入れた日本語の発音授業—学習者の気づきの促進と意識化の深まりを目指して—」『外国語教育研究』25, pp.1-19.

- 阿部新・磯村一弘・林良子（2020）「世界各地の日本語音声指導の実態—2013年から2017年の調査データによる分析—」『日本音声学会第34回全国大会予稿集』 pp.157-162.
- 王睿来・ALBIN Aaron・林良子（2021）「リピートと自己モニターを取り入れた日本語アクセント訓練の効果に関する実験的検証—中国語母語話者を対象として—」『日本語音声コミュニケーション』 9, pp.1-18.
- 王睿来・林良子・磯村一弘・新井潤（2017）「中国語母語話者による日本語名詞アクセントの習得—知識・産出・知覚の関係から—」『中国語話者のための日本語教育研究』 8, pp.61-75.
- 金村久美・松田真希子（2020）『ベトナム人に日本語を教えるための発音ふしぎ大百科』 ひつじ書房
- 呉麗楠・磯村一弘・波多野博顕・金村久美・松田真希子（2016）「JFL 環境下での発音学習ストラテジー使用と発音習得—中国の大学で学ぶ日本語学習者を対象に—」『音声研究』 20 (1), pp.6-15, http://doi.org/10.24467/onseikenkyu.20.1_6 (2023年11月4日).
- 齋藤ひろみ（1996）「日本語学習者と教師のビリーフス：自律的学習に関わるビリーフスの調査を通して」『言語文化と日本語教育』 12, pp.58-69, お茶の水女子大学日本言語文化学会, <http://hdl.handle.net/10083/50209> (2023年11月4日).
- 福田倫子・小林明子・奥野由紀子（編著）阿部新・岩崎典子・向山陽子（著）（2022）『第二言語学習の心理：個人差研究からのアプローチ』 くろしお出版
- Derwing, T. M. (2018). The Role of Phonological Awareness in Language Learning. In P. Garrett & J. M. Cots. (Eds.). *The Routledge Handbook of Language Awareness*. (pp. 339-353). New York: Routledge.
- Trofimovich, P., Kennedy, S. & J. A. Foote. (2015). Variables Affecting L2 Pronunciation Development. In M. Reed & J. M. Levis (Eds.). *The Handbook of English Pronunciation*. (pp. 353-373). Chichester: Wiley-Blackwell.
- Zeromskaite, I. (2014). The Potential Role of Music in Second Language Learning: A Review Article. *Journal of European Psychology Students*, 5 (3). 78-88. Retrieved November 4, 2023. <https://jeps.efpsa.org/articles/10.5334/jeps.ci>